

IV 総括

調査の成果

海道西遺跡は元荒川の左岸、大林河畔砂丘上に立地している（第 59 図）。今回の調査では竪穴住居跡 2 軒、火葬土坑 1 基、土坑 32 基、溝 1 条、小穴 5 基を検出した。遺構は住居跡 2 軒が平安時代のもものと比定され、その他は出土遺物等より平安時代、中世、近世、時期不詳のものに分けられる。本章では、主な遺構である 2 軒の住居跡を中心に出土遺物についてまとめ、周辺の遺跡の調査例を交えながら、古代における海道西遺跡の様相解明についての検討材料としたい。

1. 住居跡出土遺物の産地組成と地域交流

今回の調査では 2 軒の住居跡が検出された（SK01、SI02）。出土した遺物は、須恵器や土師器をはじめ、施釉陶器、磁器、陶器、土器（焙烙・支脚）、石製品、鉄製品、礫と多岐にわたるが、ここでは搬入された須恵器の産地組成について検証し、古代における流通や地域交易圏について考察することとする。

武蔵国と下総国の国境付近に位置し、また元荒川左岸の河畔砂丘上に営まれた海道西遺跡へと須恵器を供給する窯跡として、第 60 図に示した東国の須恵器生産窯跡が挙げられる。今回出土した遺物から生産窯が明らかであるものは、埼玉県比企郡鳩山町南比企窯跡群、大里郡寄居町末野窯跡群、入間市東金子窯跡群の 3 か所、茨城県のつくば市新治窯跡群、古河市三和窯跡群の 2 か所で計 5 か所である。また、生産窯は明らかではないが下総地域の特徴を有する一群や利根川流域の河川堆積物を原土とした製品も検出されている。

各住居跡について見ると、SK01 からは 159 点の須恵器が出土しており、住居内出土遺物の中で占める須恵器の割合を破片数で算出すると 14.9% である。出土須恵器の産地組成は、南比企産が 53.4%、末野産が 13.8%、東金子産が 25.8%、新治産が 1.3%、三和産が 1.3%、下総地域の特徴を有するものが 4.4% となっており、武蔵国内の窯跡の中でも南比企窯跡群と東金子窯跡群が供給主体となっていることが分かる。また、第 39 図 27 は鳩山編年におけるⅥ期、9 世紀第Ⅰ～Ⅱ四半世紀の所産であると思われる、第 39 図 28 はⅧ期、第 39 図 26 はⅨ期と幅広い年代が比定されるが、全体としては 9 世紀第Ⅱ～Ⅳ四半世紀の遺物が主に出土しているため、本住居跡の帰属年代は 9 世紀中葉～後半、或いは 10 世紀初頭までと考えられる。

SI02 からは 255 点の須恵器が出土しており、住居内出土遺物の中で占める須恵器の割合を破片数で算出すると 15.5% である。出土須恵器の産地組成は、南比企産が 62.3%、末野産が 13.3%、東金子産が 17.3%、新治産が 0.8%、三和産が 1.6%、下総地域の特徴を有するものが 3.9%、利根川流域の製品が 0.8% となっており、多少の差があるものの、SK01 同様南比企窯跡群と東金子窯跡群を主体とした供給が行われていたことが分かる。また、須恵器坯の器形や、口径と内底径からみた口径 / 内底径比率から見ると、鳩山編年におけるⅦ期～Ⅸ期、9 世紀第Ⅱ四半世紀～第Ⅳ四半世紀の製品が主となっている（第 42 図 74・76、第 43 図 80・83 等）が、第 43 図 79 のような 9 世紀末～10 世紀初頭と思われる遺物も散見されるため、本住居跡の帰属時期は SK01 同様 9 世紀後半代～10 世紀初頭であると考えたい。

本遺跡はかつての利根川流路に沿って形成された河畔砂丘の一つである大林河畔砂丘上に位置する遺跡であるが、同様にかつての利根川流路、現在の古利根川流域や古隅田川流域の自然堤防上に立地し、9 世紀代に集落が営まれていたとされる遺跡として、春日部市浜川戸遺跡や小湊山下北遺跡、八木崎遺跡が挙げられる。各遺跡の出土須恵器の産地組成についてまとめると、浜川戸遺跡（註 1）では、9 世紀中葉から南比企・東金子・三和窯跡群からの供給を受けており、9 世紀後半になると南比企・東金子窯跡群が供給量を増加させるが、三和窯跡群からも少なからず供給を受けている。小湊山下北遺跡（註 2）では、9 世紀中葉に南比企窯跡群と新治窯跡群からの供給が主で、三和窯跡群や末野窯跡群の製品

が客体的に伴う。八木崎遺跡（註3）では、9世紀後半～末にかけて南比企窯跡群と東金子窯跡群が供給主体となり、その他に下総地域や末野・新治・三和窯跡群の製品が伴っている。

これらの遺跡における出土須恵器の産地組成の特徴に共通する背景として、武蔵国と下総国の両国境を流下した古利根川や古隅田川が交錯する交通の要衝に立地しており、陸上交通だけでなく河川交通を用いた多方面からの供給ルートを持っていたため、武蔵・常陸・下総地域といった東国各地の窯跡群から須恵器が搬入されたが、武蔵国で9世紀に入り活弁に操業を展開した窯跡へと供給主体の転換が行われた、ということが挙げられる。本遺跡についても、元荒川左岸に立地し、かつての荒川と利根川の交錯地点からそう遠くない場所に位置している点や、南比企産の製品が出土須恵器における多数の割合を占めつつも、新治窯跡群、三和窯跡群、下総地域の製品が検出される点から、先に述べた春日部市の遺跡群との共通性を見出すことができる。また、浜川戸遺跡において、「近隣における古代の遺跡分布は遺跡規模の大小はあるものの河川の要衝ごとに点在している様相にあり、つまりは、島状に点在した集落が河川によって結びつけられ、1つの郡として体裁が保たれていたという立地景観が復元されている」とされていることから（註4）、浜川戸遺跡同様に、海道西遺跡もこの郡に含まれる1つの集落であったと考えられよう。

つまり、古代において海道西遺跡は、陸上交通だけでなく河川を利用して武蔵国や常陸・下総地域との交流を持った集落であり、かつての荒川や利根川といった河川の要衝に点在する他の集落との交流が積極的に行われていたと推測できる。なお、出土須恵器の産地組成から考えると、本遺跡は南比企窯跡群と東金子窯跡群の製品の割合が多く、新治・三和窯跡群の製品が少ないという特徴があり、同じような特徴を有する遺跡として先述の八木崎遺跡や八潮市八條遺跡（註5）が挙げられる。本遺跡や八木崎遺跡、八條遺跡が9世紀段階において武蔵国地域からの供給を主体としているのに対し、浜川戸遺跡や小湊山下北遺跡においては9世紀段階においても常陸・下総地域から安定した供給が行われているという差異が認められる。

このように近隣の遺跡間において産地組成が異なる様相を呈する背景としては、古利根川等河川の氾濫による自然流路の発達及び砂丘の形成といった自然的要因により、集落間における交流の停滞が引き起こされた結果、各集落の立地状況等によりその供給元が大きく異なる様相を呈するようになったと考察されている（註6）。この事を踏まえ本遺跡について考えると、南比企窯跡群や東金子窯跡群産の製品が多く搬入され、新治・三和窯跡群からの供給が少ないこと、また、本遺跡の南に位置している八條遺跡と出土須恵器の様相を同じくすること、下総地域の特徴を有する須恵器が検出されること等から、武蔵国・下総地域との交流を認めることができるが、常陸地域との結びつきは弱かったと考えられる。これを、古利根川等の氾濫により常陸地域との交流が途絶えた結果だというのはあまりにも浅慮な考えであるが、本遺跡における出土須恵器の様相は、北東側に位置する常陸地域よりも西と南西側に位置する武蔵国・下総地域との交流が都合がよかったことを示していると考えられ、そこに何らかの地理的制約の存在を窺わせるものであるといえよう。ただ、本調査で検出された住居跡は僅か2軒であり、出土須恵器についても決して多いとは言えず、あくまでも表層的な考察にすぎない。今後さらに資料を蓄積し、かつての利根川流域における集落、ひいては地域的な差異とそれを取り巻く自然環境との因果関係について検討を進める必要があると考える。

2. 調査区出土土師器について

今回の調査では須恵器、施釉陶器よりも土師器が顕著に出土した。特にロクロ成形の食膳具であるロクロ土師器が多数を占め、その数は須恵器や施釉陶器よりも多い。さらに、ロクロ土師器のバリエーションも多く、その多様性が海道西遺跡の特徴ともいえるのではないかと思わせるほどである。

そこで、2軒の住居跡（SK01・SI02）、及び1基の土坑（SK34）の資料をもとにロクロ土師器の様相を示したい。なお、分析には底部と体部の調整技法を主眼とした。各遺構の須恵器坏形土器からの年代